
メリッサの愛=デウリーの哀

朱鷺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メリッサの愛＝デウリーの哀

【Zコード】

Z49810

【作者名】

朱鷺

【あらすじ】

伯爵令嬢メリッサは、ある日父から結婚相手が決まつたことを告げられる。

よりによって、毛嫌いしている従兄弟と！
思い余ったメリッサは、修道院へ。
そこに、運命の出会いが…。

嘘ぴょん。猫がぶり令嬢とヘタレ盜賊のブラックメディーー！
が、真実です。

(前書き)

勢いで書いた小説です。

オチ：なしです。

小説サイト『翠縁玉の誓文 すいりょくめいのせいかぶん』より、改訂しました。

ワタクシ
私の名は、メリッサ。

しない伯爵令嬢ですわ。

ダンスも詩作も一通りこなし、おしとやかな令嬢と褒め称えられておりますの。

そのおかげか、周囲から良き妻、良き母になると讃われておられます。

今日も朝は、何時もびおりに始まりました。

それが破られたのは、お父様からの呼び出しだしたわ。

「おせよハジヤルコモク。お父様、」¹壮健でなによつですわ

「おお、おせよハ。メリッサ。相變わらず、美しいな」

「あつがヒハジレコモク」

「こまでは、何時もびおり。意味も無く、何処其処のハシ息が良かつただるい」というだらな話が繰りはずでした。

やむひ、咳払いをすると話しうったわ。いつものお小言みたこと。

「むつとも、お小言のまつが良かつたけれど。

「メリッサ。お前は、もう15歳だ。それで、結婚相手はもう見つけである」

「はあ…」

「ラールスだ」

「失礼ですが、お父様。ラールスとは、ラールスですか。従兄弟の」

「そうだ」

重々しく頷くお父様ですが、二重あごがタップンタップンと動いて帰つてユーモラスですわ。威儀が、全くありません。

あのラールスと…

「…幸い、ラールスは…」

お父様がじちやじちや何か抜かしていますが、聞いておりません。

私、それどころではあつませんでしたから…。

白茄子ラールスと！ラールス！

どうやつて結婚を回避させましょう。

いつかは襲来してくるものです。結婚というものは、それなりの用意と、覚悟はしております。

ただし！今回誤算だつたのは、相手がラールス！ということです。相手が、ラールスでは山に埋めることもできません。闇討ちもつてのほか。

どうして、ラールスを相手に選んだのか。忌々しいことです。

お父様の執務室を辞した私は、直ぐに従者を呼びました。

「私は『与えられているお小遣い…財産から雇つて』いる従者です。

「ラムティ、ジョイン。4頭馬車を用意しなさい。修道院へ行きます」

修道院。神を伴侶とし、日々を神への祈りと清貧で暮らす場所。あんな奴と結婚するくらになら、退屈に殺されたほうがましです。

盗賊がいるのに、護衛が1人だけとは無知とは恐ろしい。

「愚か者め、デウリー様がいるのにこのこと」其の日は、とても良い日になりそうだった。

いや、なるだらう。

足元の谷間には、豪奢な4頭馬車が走っている。

護衛も少ない。

不気味に笑う若い男に、盗賊が今日発足したから知らないのは当たり前だろうと突っ込むものはいない。

デウリーは、にんまりと笑うと後ろを振り返った。

そこには、人相の悪い男が20人ばかりいた。

「丁度いいぜ！俺達の盗賊デビューに相応しいお嬢ちゃんだ！」

「おー！」

何ですか。騒々しい。

ラルースのおかげで、不愉快な未来に向かわされる。

其のことに対して、気持ちを落ち着かせているというのに。

いらだち交じりに扉を睨みつけると、薄汚れた男が現れたのです。

あら、まあ。

金髪に血のような赤い瞳。薄汚れた茶色とも土色とも付かない上着とズボン。

ラムディ、ジョインは盗賊たちに捕まっていました。何をやっているのですか。

ピーンとひらめきました。

天の恵みです。いいえ、天啓です。

私は、予備動作無く男の胸倉をつかみました。

安物らしく、か弱い私がつかんだというのに容易く破けましたわ。

「なななあなたなんあな」

「若い！」

25、6歳でしょう。理想的！

「たくましいわ！」

がっちりした体格！上腕の筋肉！健康的な小麦色の肌！ラールスの
ような白茄子肌ではない！

「顔もいいし！」

白茄子のようなふにやけた顔立ちでは有りません！

品の無い顔立ちですが、贅沢は言ひていられません。
「決定！」

「しかし、お嬢様……」

「ラムディ、ジョイン。お給料を払つて居るのは」

「メリッサお嬢様です」

「奥さんの治療費を払つたのは

「メリッサお嬢様です」

「7日に1日、お休みをあげてこるのは？」

「メリッサお嬢様です」

「よろしい。分つてゐるのなら、おやりなさい」

「はい。メリツサお嬢様」

「全速力で行くのです。さあ！！！！！」

良案を思いついた私

と、水を指す者が一人。私の問いに勢いよく応えていたジョイン！

「あの…お嬢様。俺逮捕まつてます」

はつ。

ラムディの首には両刃剣が。地面に転がっているジョインの上には盗賊が。

第六章、おめでたす

びっくりして固まっている盜賊頭領を、馬車内に放り込み。

紅玉をちりばめた首飾りと指輪を、盜賊達に投げ与えました。

「ぐらつ」

ジョインの上にのつかていた盜賊が、もんざりうつて転がり落ち。

「がつ…田がつああ」

両刃剣をつきつけていた盗賊が、顔を押さえ座りこみ。

そんなに喜ぶなんて…。恥ずかしいですわ。

「ジヨイン！」

「なななあなたなんあな」

「おつお頭ー」

何やら知らない男達の悲鳴が聞こえたようですが…善は急げですわ。

盗賊頭領が騒いでいるうちに、教会が見えてきました。

我が家に恐れをなしたのか、道行く人々が脇に寄つて下さったお陰でしそう。

…ラムティ、何ですの。その、何か言いたげな表情は。

扉を蹴り開けると、そこにはボヘとした間抜けジラの神父様が。

グットタイミングですね。

「神父様。お願いがありますの。今すぐ、結婚式をあげたいのです
が…」

「へ？え？しかし、メリッサ様、確かに貴女はラルース殿と…」

「神父様！善は急げと申します。祝詞をお願いしますわ」

それでも、じぶりもじぶり泣る神父様に、わたくし私の慈悲も爆発しそうです。ええい、まじめにいい御方ですわ。空氣の読めない男は嫌われますわよ。

「まあ、確か……『薔薇の宴』という女性ばかりの館で神父様の

「わー！わー！わー！わー！」

あら、神父様とあらうお方が、教会で大声を出すなどと…はしたない真似をなさいますのね。

ぜいぜいと肩で息をする神父様。ビリしたのかしい。お年は40過ぎたばかりのはず。

興奮するような事があつたのかしい。

「わかりました。では、」元気「

威儀を保つつもりでしじつか。胸を張つて、祭壇へ導く神父様が滑稽ですわ。

おほほほ。

これも、普段から入念な身辺調査を積み重ねた成果でしじつか。

ああ、わたくし私を褒めちぎるかのよつて、ステンドグラスが輝いておりますわ。

「主なる神の……省略。メリッサ、汝は、伴侶が病に倒れ、苦難が襲

い掛かるつとも、愛するこじとを、主の右手に誓いますか」

「はー。誓います」

「そひらの男性は、伴侶が病に倒れても、喜びが逃げても、愛する

ことを、主の右手に誓いますか」

「…………

「あら、貴方。誓いの聖句を。一 わあ……」

早くしてくださいな。片手で両刃剣とこのつのは、結構疲れますのよ。

「…………はー、誓います」其の後、感極まつたのか、泣き出しつしまいました。

「といふで、貴方、なんてこいつが前ですの」

「テウ

「テウ?」

「デウリーだ!何なんだ!あんたらはーーええーーひ、くそ女ー手を離しやがれ……」

マリッジブルーとこのつのは、ビヒヤヒヤの男性も陥るよつですわ。

頸動脈とこのつのは、ヒヒヒショウつか。

のど仮を刃で押すと、曰那様は真っ青になつて黙つてしまひました。

どうしたのかしらね。

では、みなさん。御機嫌よう。

おほほほほほほほほほほほほほほほほほほほほ

(後書き)

感想お願いします()

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4981o/>

メリッサの愛=デウリーの哀

2010年10月30日16時33分発行